「文学研究」から「文化研究」へ

---「文化構想学」科における教育・研究へ向けて---

堀　まどか

(要旨)
「文学研究」から「文化研究」へ移行してきた自分自身のこれまでの研究過程をふりかえり、現在の関心や最近の調査などを含めた研究や専門性を「文化構想学」の教育目標のなかでどのように実践的に展開したいのか、学生たちの感想を紹介しながら、展望を記した。

１．はじめに

文学研究が捉えるべき射程を、どう設定するべきでしょうか。じつは文学こそ、民族や国家の集団全体に関わる思考法や倫理観、そして歴史的記憶を作り出してきた装置であったともいえます。そのように考える場合、文学研究は文化研究にかぎりなく近づいています。(ここでいう文化研究は、「カルチュラルスタディーズ」(Cultural Studies)という学問ジャンルを指すというよりは、文化の研究という意味です。)

「文学」を文学研究だけで考えることは出来ません。それは、「歴史」を歴史学研究の枠組内だけで考えることができないということと同様です。というのは、歴史とか文学という概念自体に、理論的な混沌と変革の枝葉が内在しているからです。もちろん、歴史的推論には、証拠や論拠が当然ながら必要です。ただ、歴史学者の考えるような実証性や記録の痕跡を離れて、人のさまざまな「記憶」や「口承」あるいは「伝説」のなかにも「歴史」があると考えることもできます。ある地域に生きる人びとが想像／創造した共通の「記憶」が、広い意味での「歴史」と考えることも可能なのです。「文学」のもつ力や、「文学」が果たしている役割とは、そのようなものと重なるところが少なくありません。

近年、「世界文学」ということばをよく耳にするようになりました。これは近年に始まった概念ではないのですが、ひとつの言語で編まれた文学が、以前よりも増して、さまざまな国々や多彩な言語文化圏で読まれるようになってきており、世界文学の観点や方法がますます強調されてきているのです。日本の文学のありかたも、その読まれ方も、かつて想定されてきたよりもさらに拡大した枠組のなかで問い直されようとしている時期にあると思います。アジア全体をより強く意識した観点から、新構築するべき時期にきているといえます。日本文学は、かねてより世界の文学のなかで一定の人気を保ってきましたが、近年ではさらに、世界文学のなかでの観点や方法、アジアのなかでの位相が注目されているの

です。

大阪市立大学文学部に新設された文化構想学のなかで、私の所属する「アジア文化コース」で掲げている学びのキーワードは、「地域」「共生」「比較」であり、**「アジアの文化的ダイナミズム」**というテーマに迫ることになっています。そこでは、日本を含めたアジアに対する深い理解と共感、現代の文化状況への鋭い感性、文化にアプローチするための専門的知識を養うことをうたっています。所属する教員それぞれが、さまざまな方法でこのテーマについての研究・教育を行っているのですが、私自身は、日本社会を国際的な観点からを眺めるという点で研究・教育活動をおこなっています。とくに**「人の移動」と「境界」を考える**ということを自分の核となるテーマとして位置づけています。

本稿では、私のこれまでの研究を振り返り、現在の研究について概略を示し、文化構想学科の教育のなかでの今後の方向性をかんがえてみたいと思います。

２．これまでの研究、これからの研究

私自身の研究は、おおきく次のような三つの柱に区分できます。

A)　境界者・移動する人間の理解と再評価

B)　文化・芸術・文学の理解をふかめる文化研究

C)　戦前戦後の日本語文学の研究

私が大切にしたいのは、「Border」（境界／周縁）からの視点や視角を意識することで、いままで見えていた自分の世界観に変化が起こせるのではないか、ということです。

まず、**A）境界者・移動する人間の理解と再評価**ですが、私がライフワークとして研究しているのが、バイリンガル詩人・野口米次郎で、おもにその研究を軸に、彼の周辺の文化人や詩人たちに注目してきました。野口米次郎は、日本語と英語で執筆して、２０世紀初頭には英語圏でも日本文壇でも名を知られていた国際派詩人です。このような人物を扱うためには、「一国文学史」観ではない国際的視野を意識しなければならず、また個々の流派の文学史観から文芸・文化の全体像を見わたす必要がありました。さらに、この人物を探ることが、近代の国際的な潮流の中に内在した「近代」を乗り越える価値創造（地域に根ざす伝統・文化の再発見、古典評価など）の過程を、考えることにも繋がりました。

どうして20世紀転換期にアジアの片隅にすぎない日本の一若者の英詩が、アメリカやイギリスで評価され得たのか、どうして現在では批判されて忘却されているのか、といったごくシンプルな問いから、この人物の研究が始まりました。結論からいうと、まず、東西の詩学が融合して刺激し合った時代、それぞれの地域文化のなかの神秘主義の精神世界が注目されていた時代に、野口米次郎のような東洋からの詩人が注目されたということ。そして、敗戦直後の「文学者の戦

争責任」という評価の轍が長くつづいていたため、ということになるでしょう。野口米次郎は、日本の詩歌の特徴を「沈黙の美学」として説明し、自分でも英詩を書いたのですが、その言論は、詩や俳句の解説だけでなく、能楽、茶道、日本の美術などにも関わっています。従来の研究では、彼の日本文壇における貢献や日本語での活動についてはほとんど研究がありませんでした。また日中戦争勃発時にインドのノーベル文学賞作家・タゴールと論争になったということは「知る人ぞ知る」事実でしたが、タゴール以外のインドとの関わりや、野口の戦争詩や戦時協力にいたる中身（公的な活動の表面や、個人的な葛藤と挫折の表現）については明らかにされないままでした。これらを現在の視点から見直してみることは、過去の歴史を学ぶことだけではなく、じつは、現在を理解し再考してみることにも繋がります。

私が試行錯誤の研究過程でつねに意識していたのは、二つの座標軸を見失わないようにすること。ひとつは、詩学の文化伝統に目配せする日本文化研究や日本文学研究の側からの縦軸のアプローチで、もうひとつが、象徴主義やモダニズムなどの国際的同時性に着目する横軸です。この詩人に限ったことではないのですが、ひとりの人間の「生」は、とくに「境界者」といえるような人物の足跡をたどるためには、こういった幾つかの座標軸を考える必要があると思います。つまり、野口米次郎というひとりの詩人の人生を追いかけるためには、日本文学・英文学といった個々の学問領域を超えて、文化全般、さらには思想全般の国際的、国内的な動向とを関連づけて考察する立場が必須となり、学芸ジャンルの領域を横断する視点が、必要不可欠になっていました。

現在は、野口米次郎だけに関心があるのではなく、野口米次郎の周辺の人物や、また、野口のように「境界性」を意識した人間、移動する人間の生活と意識に、全般的に関心があります。

私の研究の二つめの柱としては、**B）文化・芸術・文学の理解をふかめる文化研究**ということがあります。どのように国外発信され、それがまた国内で再構築され、「伝統」の再生産・創造がおきるのか、という文化形成に関する研究です。さきほど触れました野口米次郎という詩人は、詩作にとどまることなく、日本美術や浮世絵、能・狂言の海外への紹介者としても国際的に活躍していて、彼の人生を追おうとすれば、その仕事が海外のジャポニスムにどのように働きかけ、どのような役割を担ったのかについて考察を試みることと不可欠でした。そのため、詩人の研究をする試みは、文化研究や文化交流史のほうに近づきます。たとえば、野口米次郎による能の紹介は、それまでの外国人紹介者と比較してどのように異なる要素があったのか。野口米次郎はモダニズム芸術の観点やモダニスト演出家たちの言論を意識して、能を紹介していますが、その中身がどのようなものなのか、といったことです。このような、能に関する野口の著作を検討していくと、そのすべてが彼の詩人としての詩学の実践であり、かつ国際的モダニズム芸術の志向性と密接に関連していたことがわかりました。

このような「文化研究」をおこなうときには、注意するべき二つの点があると思っています。ひとつは、対象とする文化事象の時代性が考慮されなければならないということ。それぞれの事象に、伝承、伝播、創造があり、そこの歴史をたどる必要があります。つまり、概念史への眼差しといってもよいかもしれません。何が、いつ、何に対して、言われているのかに注意深く迫り、文化を形成する個々の基礎概念の形成過程を意識しておくことが重要です。もうひとつは、「文化」という言葉の背後にある「国家」を意識しておくということです。何かの「文化」が強調されるとき、そこには民族主義やナショナリズムが見え隠れすることを念頭に置くべきであろうと思います。

基本的には、私の関心は、文化形成が、人と人との会話と同様に一方通行ではなく、インタラクティブに進んでいるということであり、各国ごとに行われる文化研究の国境を越えて、学術領域の境界をうちやぶって、多様な文化接触の連鎖や、文化交渉の歴史の過程を明らかにしたいと考えています。そのためにも、この二つの注意点は大事だと考えています。

さて、もともとの私自身の興味のあり方が人間の移動とその記憶であり、とくにアイデンティティの問題でありましたので、最近は、**C) 戦前戦後の日本語文学の研究**を自分の研究の今後との柱のひとつと考えています。これは、私の研究のなかでは、国民国家の集団的記憶、「居心地の悪さ」を考える研究でもあり、文学作品を素材にしながらも、より文化研究へ向かっている自覚があります。じつは、もともと野口米次郎の研究を始めた端緒は、アメリカへの初期日本人移民と、1900 年代の渡米奨励論、女性向け渡米奨励論、政治家たちの殖民論のズレに関心をもったことでした。そこで野口米次郎という詩人に出逢って、彼の再評価に挑戦することを試みてきたのです。しかし「境界者」をテーマにする場合、アジアも視野にもいれなければ、近現代の「日本」の実像は語れないと感じていました。野口米次郎の伝記『「二重国籍」詩人 野口米次郎』を書いた後、二年半ほど韓国で日本語・日本文化について教える機会を得ました。

韓国の教育現場では、自分が知らず知らずに持っていた文化や認識を新しい形で突きつけられることの連続で、学問上のジャンル意識が完全に崩壊しました。学問領域や専門性という意識を離れて、ひろく「文化」を考えていきたいと思うようになりました。これは以前に事例をあげて書いたことがあるのですが、ひとつの作品の読み方には、ある文化圏のなかで独自に共有される方法や法則があって一概に「共感」を誘えるわけではない場合があります。また、そのような法則に縛られない「共有」「共感」を生む場合もあります。どういうときに、それが起こるのか。ある文化圏内には、読み方の癖や法則、文脈のとりかたや、その理解の背景となる標準的規範があり、それは美意識や詩学や宗教観にも繋がっていくことです。文学の成立、文学の作られ方、文学の読まれ方などを意識していく場合、それは「文化」研究のほうに近づきます。

海外で教えたことで、私にとって学問上の境界は完全に融解したのですが、日

本の「文学」のもつ可能性と独自性を文化の面から考えてみたい、それは「世界文学」のなかで注目されうるもの、そこから日本文化の特徴をあぶり出せるもの、という気持ちが強まりました。現在は、日本を中心とした「帰還／引揚げ」や「亡命／難民」の問題とその記憶を問い直すという点に大きな関心をもっています。いうまでもないことですが、日本語はかつて「世界語」「帝国語」であった時代があり、「日本人」以外の人々にも共有され使用されてきました。それを意識する場合、最近では「日本語文学」「日本語圏文学」という言い方がされるようになっています。そのような移動の歴史や移動する人間の記憶から、一国文学史観を超えたアジア全体での共感やリアリティを共有できる日本の近現代文学の歴史を考えて見ることを試みてみたいのです。（あるいは共有できないかもしれませんが、もし共有できないとすれば、どこに課題があるのかを考えながら、日本語文学の問い直しを課題にしたいと思っています。）

３．「文化構想学」科における教育活動をかんがえる

さて、このような私の研究や専門を、どのように教育活動に活かしていけるのでしょうか。大阪市立大学の 2019 年 4 月新設「文化構想学」科の新学科特設サイトには、**「文化を学び、現在を問い、社会のこれからを作る人になる」**という目標が掲げられています。

- 文化は創造力や感性を育むことで豊かな人間性を涵養するとともに、来たるべき社会の新たな価値を創出し、他者との共感を通した相互理解を促進することで、共生的社会の基礎を形作ります。
- 文化構想学科は、従来の学問分野からはこぼれ落ちてしまいがちな文化的事象をも積極的に考察対象とすることで、現代社会で必要とされる文化への深い理解を養います。
- また、そうした深い知見に根ざしつつ、多様な文化的事象を社会のなかで積極的に活用することで、現代社会が抱える諸問題の解決に取り組み、21 世紀型成熟社会を文化の面から担う人材を育てます。

（「文化構想学とは」（大阪市立大学ＨＰ） https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/cm/ （2018/9/1）

このような目標のために、つまり、未来志向の「東アジア」のあり方を考える実践的な「文化構想学」の教育のなかで、いったいどんなことが考えられるでしょうか。試行錯誤の最中なのですが、「文学研究」から「文化研究」へというテーマは、現在の私の関わる教育活動の基軸になっているとつねに感じています。

一例として、2019 年度の秋に授業のなかで扱った「サハリン」という場所の

記憶と文学から学生たちがどのようなことを考えたか、について紹介します。

日本は島国であり、陸地のなかに国境線がひかれるという状況は、現在の日本国内のなかにはないのですが、戦前には、日本の領地のなかに国境線がありました。樺太（＝現在のサハリン）です。日露戦争後のポーツマス講和条約で、南樺太が割譲されます。つまり 1905 年から、1945 年までの 40 年間、北緯 50 度線以南の樺太が日本領でした。この、《ポーツマス講和条約で、南樺太が割譲される》という歴史的事実については、歴史の授業で学んだはずで、暗記させられた事項かもしれません。しかし、その事実にどのくらいリアリティを感じて認識しているでしょうか。現在の若い世代の日本人にとって（北海道や東北などサハリンが身近な地域に住んでいる場合や、自分の祖先がサハリンにゆかりのある場合などを除けば）、「樺太」という地名には、ほとんど実感が伴わないのが現状ではないでしょうか。

いったいどんな島で、どんな人びとで構成されているのか、いかなる歴史を持っているのか、また、どんな産業がさかんで、どんな天然資源がある／あったのでしょうか。[1]「境界」を考えるという視点から、どのようにサハリンの歴史と社会について学ぶことができるでしょうか。たとえば、サハリンに暮らす朝鮮系ロシア人（あるいは無国籍人）の歴史と経緯を知ることは、「人びとの移動」の歴史と現在の社会形成を考えることでもあります。現在の朝鮮系ロシア人に対する、研究者たちによる区分けには、どのようなものがあるのでしょう。それは当然ながら、戦争やポストコロニアルの問題と深く関わっており、現在サハリンのあちこちに建立されている朝鮮人慰霊碑や日本人が引き起こした虐殺事件などの民族間摩擦の悲劇についても再考することになります。戦後の日本人の引揚げの主なものは、1947 年 7 月に終了しますが、しかし朝鮮人は引揚げの対象から外されて、樺太在住となったものも多く、朝鮮人と結婚していた日本人女性たちも、そこに残った者が多数います。現在のサハリン残留朝鮮人、そして残された日本人妻が生まれることとなった歴史的な経緯を知ることになります。

ソ連が対日宣戦布告を行ったのが 1945 年 8 月 8 日で、広島の原爆投下の後であったことは日本の歴史のなかでは良く知られている事実です。ただし、翌日から日ソ国境付近で戦闘が始まり、ソ連軍の南下や空爆、ソ連軍が 8 月 18 日に千島列島北端の占守島（Shumshu）に上陸して日本兵と激戦を繰り広げたことにはあまり実感が伴いません。沖縄戦やヒロシマについては多くを学びますが、北方で 1945 年に何が起こっていたかは、あまり学ぶ機会がないでしょう。（ロシア

[1] もともとアイヌやいくつかの先住民族が住んでいた島だが、1905 年に正式に南樺太が日本の領土になり、1910 年の時点で、樺太の人口の 90%を日本人が占めた。水産資源が豊かで、1910 年代後半から森林資源開発が進んで製紙・パルプ工業の島として発展してゆき、日本人移住者の生活基盤がつくられていき、さらに 1920 年代には石炭業がひらかれ、より多くの労働力が必要となり、朝鮮半島などの外地からも樺太に人が流れ込んでいく。現在においても、石油や天然ガスも産出する資源豊かな島であるが、国家の収益となるため、一般の生活は素朴である。

の戦争記念館では、占守島上陸作戦がノルマンディー上陸作戦のように、民を救う英雄として、ジオラマ化されて展示されています。戦争シーンのジオラマは、日本の平和記念館や歴史博物館ではあまり目にしません。平和教育の課題点も考えることになります。）また、サハリンに残る製紙工場の廃墟や神社の跡地についても思いを馳せ、「ダークツーリズム」や「負の遺産」について考える機会をもちました。以下は、サハリンでのフィールド調査（2019 年九 9 月 14―19 日）のなかで撮影した写真です。現地報告を兼ねて、いくつか写真を紹介します。

a

b

c

d

a　サハリン州立郷土博物館（日本時代の樺太庁博物館（1937 年 8 月開館）の建物と展示物の一部を受け継いだもの）

b　樺太時代の奉安殿（サハリン州立郷土博物館の敷地内に移築されたもの）

c　日本人が住んでいた樺太時代の歴史に関する展示。

d　この地域の先住民であるアイヌやニブフの民俗学的資料。

e

f

g

e～g　サハリン州立郷土博物館（2019 年 9 月 14 日撮影）での、サハリン在住朝鮮民族に関する展示のオープニング。（サハリン島には多くの朝鮮系ロシア人が居住しているが、その歴史や文化についての展示が州立郷土博物館に無いことは問題ではないかという観点から、2019 年 9 月 14 日から地下のホールで初の特別展示が開催された。そのオープニングセレモニーには、朝鮮系ロシア人たちの子供たちの踊りが披露された。（写真 g）

h

i

j

h　日本兵に殺害されたことを記す朝鮮人被害者の碑（大泊／コルサコフ）

（サハリン南部の港・コルサコフは 1790 年に松前藩によって交易所が開かれる。1875 年に日露間で結ばれた樺太千島交換条約によって、樺太全体がロシア領になりコルサコフとなる。日露戦争後にサハリンの南半分が日本領になり、大泊と改称。稚内を結ぶ連絡船が発着するようになった。（敗戦時、引揚者はこの港をめざし、難民キャンプで引き揚げ船を待った。）

i～j　ロシア我が歴史博物館（豊原／ユジノサハリンスク）のジオラマ展示

（占守島（Shumshu）上陸の様子や、50 度線での日本軍との戦闘の様子が等身大ジオラマで展示され、学芸員による解説ツアーが毎回行われている。）

本稿では、授業の内容や、そこで扱った文学作品の比較や内容分析については取りあげません。ただ一点、ここに付記しておきたいのは、文学作品を読むということで、また新しい観点から、サハリンの戦前戦後の記憶をリアルに感じることが出来ること。それに加えて、戦後の日本社会の特徴を考えることにも繋がるということです。たとえば、サハリンの記憶をテーマにした作品として、吉田知子の「豊原」や李恢成の「砧を打つ女」があります[2]。両作品とも、同世代の作家で、1944 年から 1947 年頃までのサハリンを舞台にした作品を書き、同じく 1970 年代初頭の時期に、日本社会のなかで読者を獲得して、一時代と社会状況を反映しているといえます。どちらの作品も、少年の視点から母を語る物語であり、外地で少年期を過ごした記憶と引揚げ体験を描きます。この二作品を授業のなかで取り上げたとき、ある中国人留学生は、どちらの作品にも強く共感できると述べて、「少年不識愁滋味」という宋代の詩を思い出した、と感想をしみじみと述べていました。

本稿では、文学からみるサハリン社会と戦後日本の「文化的ダイナミズム」の事例を述べることは省略しますが、ここでは、学生たちの授業の感想に注目してみたいと思います。学生たちはどのようなことを考えたのでしょうか。（これは、

---

[2] 吉田知子（1934～）は、父の転勤により、満洲をへて1944年に樺太に移り、終戦を迎え、ソ連の空襲を体験、1947年3月に引き揚げた作家。小説「豊原」は1967年に発表され、『無明長夜』（1970年新潮社/芥川賞受賞）に収録されている。2019年12月27日に静岡でインタビューをおこなった際、吉田氏は「たくさんの小説を書いたので詳細を忘れてしまっている作品があるが、小説「豊原」はとくに好きな作品で、思い入れが強い」と語っている。一方、李恢成（1935～）は、樺太で生まれ、吉田と同じく1947年に朝鮮人としてサハリンから日本に引き揚げている。早稲田大学のロシア文学科を卒業後、朝鮮総連に就職し、サハリンを舞台とした小説「砧をうつ女」で1972年に芥川賞を受賞。在日朝鮮人作家として、日本語で書き、日本社会のなかで評価され、広く読まれてきた。「豊原」と「砧をうつ女」は、ともに少年の視点から母を描く物語だが、民族や国を背負うことの重みも、外地に暮らすことの意味も、対照的だといって良い。描かれる母の生き様や性格は全く違い、夫婦関係・親子関係・親類関係の違いも、ケンカの仕方も、戦時期のとらえ方も、非常に異なる。しかし、どちらも読者の心を打つ。サハリンというひとつの土地の記憶を描写するひとつひとつを文学作品のなかで読み解いていくことは、戦前の樺太（サハリン）を考えることだけではなく、戦後の日本社会のなかのさまざまな人間生活のダイバーシティを読み解くことにも繋がっていく。

2019 年秋に「日本事情１B」のクラスで、「サハリン」「人の移動」というテーマで講義をし、講義のあとには学生同士が議論しあう時間を設けたときの期末の感想になります。)「サハリン」という地域について学ぶなかから、「国境を考える、人の移動を考える」というテーマのなかから、どのような問題意識を得たのでしょうか。

学生感想①　国境とは国と国の間にある線は、世界地図みたいに目で見えるものだけではないことを学んだ。文化や言語、志向の他に人種という観点からも国境があることを理解した。人種といっても、ひとくくりにすることが出来ず、土地や国籍、結婚、家庭、性別といった線引きによって、さらに人々の国境が生まれている。

学生感想②　もともとの生まれは朝鮮とはいえサハリンで育ちながら、現在の家族を置いてまで母国に帰りたいと願うのか、理解できなかった。(自分は、引っ越しや留学の経験がなく、自分の故郷へ帰りたいという感情になったことがないので、) なぜ故郷にこだわるのか、事情を調べ考察した。調べるうちに、「外国人」として扱われるという苦悩を抱える人がいることが分かった。これは現在にも繋がる問題である。さまざまな国のルーツをもつ人々はこれからどのように共存していけば良いのか、考えている。

学生感想③　国境紛争の課題について、この授業で調べるまでは対立している事実しか知らず、何故対立しているのか、どのような点で争っているのか、全く知らなかった。対立しているという点で見ると、両国とも自分の国の主張が正しいと思うだろうが、争点などを整理して客観的に考えて見るとそうでもないかもしれない。ただ、基本的な情報しか報道しないから、公平性を保つのが難しい。各国の対立とは、それぞれの立場両方の意見を取り込み、その上で自分の主観を交えずに客観的に判断しないと、どちらに正当性があるのかは見えてこないと分かった。

学生感想④　「異文化の受容能力」は、戦後の日本教育の賜物とも考えられる。(世代によっては、まだ「異文化の受容」が課題であるかもしれないが、討議の結果、若い世代は異文化受容を当然視していると分かった。) 現段階で必要とされる、日本の国際化教育は「異文化の受容」ではなく、「自国の文化理解を深めること」である。自分の文化や自国への無関心さが問題である。

学生感想⑤　「平和とは何か、どう定義するか」ということを話し合ったとき、外国人留学生が「差別のない状態」だと言い、自分には思いつかない考えだった。人とこのような話題について話し合ったりするのは、最初は気が

重いと思ったが、次第に面白くなった。

以上のような感想は、まさに「文化構想学」のめざしている目標を示唆していると思います。つまり、「他者との共感を通した相互理解を促進し、「共生的社会の基礎」を形づくるための、さまざまな知見や歴史意識を培い、社会の未来を作るために何が必要かを学生が主体的に考え始めていると感じます。また、「サハリン」という地にまつわる記憶という、従来の学問分野からはこぼれ落ちてしまいがちであった「文化的事象」をテーマにして、現代社会の課題にもつながる文化を理解しようとしているともいえるでしょう。そして、このような学びの積み重ねは、現代社会が抱える諸問題の解決に取り組み、二十一世紀型の成熟社会を文化の面から担う人材の育成につながっていくのではないか、と期待するところです。

４　おわりに

今回のプロジェクト「文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る」（「日本文学を世界文学として読む」第二弾）は、「文学」のもつ特質を意識的に把握しながら、そして文化認識や歴史観の同時代的な現象を問題にする立場を投影しながら、「文学」を中核にした研究や教育の可能性を考えてみることを目指したものでした。文学研究の従来の学術方法やジャンル意識を超えて、未来にむけて発信することを考えるとき、そして、国際的に展開していくための方法を考えるとき、「文学研究」は「文化研究」に近づいていくのではないか、と私は考えます。とくにあちこちで多文化社会が拡大している現在、「文学」研究の捉えるべき射程や方法は、越境する複数領域の学問ジャンルと融合しており、その重要性が増しています。

私の研究は、「文学研究」なのか、「文化研究」なのか、立ち位置や所属する学術ジャンルがあいまいに見えるかもしれません。私自身は、自分の専門を「国際日本研究」と説明するようにしていますが、これもわかりにくいかもしれません。ただ、簡単にいうと、私自身が文化や歴史を考えるときに大切にしたいのは、「人間」という個々人のレベルにまで視点を落として考えて眺めたい、ということです。人物研究や人間の記憶や体験に関する理解が、国境や文化の枠組を越えて共感や理解を得る「鍵」になるのかも知れないと考えています。文学というものは、人間の記憶や人間の生き方に一番近いところに位置しているのだろうと思います。人々の生きている記憶、たぐりよせる記憶、過去から現在にまで繋がる時間のなかで響いてくる記憶、そして、国民国家の集団的記憶にも関わり、思考方法や倫理観や文化意識にまで影響を与えている記憶。このような、すべての記憶を表象しうる「文学」は、まさに文化研究につながっているものであり、もっと大きくいえば、文化研究や人文学研究の可能性を拓いていくと考えます。

「研究科プロジェクト」成果報告書
『文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る』
（「日本文学を世界文学として読む」第２弾）

令和2年（2020）3月31日発行
編集　堀まどか
発行　大阪市立大学大学院文学研究科　都市文化研究センター
〒558-8585　大阪府大阪市住吉区杉本3-3-138
電話 06―6605―3114
ホームページ　https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/ja/

印刷　博進印刷株式会社
〒559-0002　大阪府大阪市住之江区浜口東2-7-24
電話 06―6678―5151

Urban-Culture Research Center
大阪市立大学大学院文学研究科　都市文化研究センター

2019年度・「文学研究科プロジェクト」成果報告書

「文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る」

【論文】
慶滋為政の和歌序 ―摂関期の和歌序の特質―
山本 真由子　(1)

『今鏡』と『大鏡』の皇妃描写 ―「帝王の寵妃」という人物描写について―
小笠原 愛子 (15)

The Reception of ‘A Fairy’ in Modern Japanese Literature:
‘Changelings’ from Irish fairy folklore in Hiroko Katayama’s Works
NAGAI Izumi 左(1)

【研究報告】
世界史叙述メディアの新地平 ―学習歴史漫画を超えて―
草生 久嗣　左(7)

ドレフュス事件から見る「ユダヤ」と「文学」
鈴木 重周　左(19)

西部劇イメージを利用したポピュラー音楽の戦争を経た翻訳
永冨 真梨　左(25)

外国人旅行者の意識からとらえた中崎町のイメージ形成
嵜本 圭子　左(31)

文学研究から文化研究へ ―「文化構想学」科における教育・研究へ向けて―
堀 まどか　左(41)

研究会報告　(ⅰ)
執筆者プロフィール　(ⅵ)

大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化研究センター(UCRC)